

調べよう酪農の仕事 ～牧場で牛乳を搾ってみよう～

目 標

- ・酪農体験を通して、食料生産に携わる人々の営み、その努力や願いを体験的に知ること、働く意味や食生活、生物の命について考えるとともに、社会科における農業に関する学習を実感的に深めることができる。

育てたい力

- 酪農の仕事の様子を実際に見聞し、その努力や苦労について体験活動を通して学ぶことで、従事する人々の思いや願いに共感し、考えることができる。
- 実際に牛に触れたり、餌やり、哺乳・搾乳体験を行ったりすることで、生き物への愛情や命を大切にしている心情を育てるとともに、自らの食生活への関心を高めていく。

主な学習活動（総合的な学習の時間：5時間、社会科：1時間、道徳科：1時間）

わたしたちの
北海道の様子
（4～5月）
いのちの教育
（9月）

調べよう
酪農の仕事
（9月）

地域の資源を
生かすまち
（1月）

- ・北海道は酪農が盛んで牛乳生産量の多さや乳製品の品質の良さについて学び、また、「いのちの教育」で「人の誕生」についても学び、酪農体験との関連付けも行った。
- ・関ファームに向かい、搾乳・哺乳体験、餌やりを体験した。餌やりの活動では、乳牛の大きさに驚きながらも、自分から積極的に頭をなでて餌を与える様子が見られた。搾乳体験で搾りたての牛乳の「温かさ」を感じ、哺乳体験では哺乳瓶から乳を吸う力強さに生命の尊さを実感した。
- ・数多くの牛が飼育されている様子を見学、その作業の大変さや工夫について考えた。作業や乳牛について進んで質問する子どもがいて、スタッフの方も熱心に答えていただき、働いている人の努力や苦労、やりがいを教わった。
- ・牧場長から、雄牛や廃用牛のことなど経済動物としての「乳牛の一生」について説明があり、酪農家として乳牛への感謝の気持ちや、食べ物を大切にする意味を話していただいた。
- ・3学期の社会科「地域のしげんを生かすまち」で帯広の菓子製造を学ぶ際に、牧場での体験活動を想起させ、新鮮な牛乳が手に入りやすいなど、地域の農産物を生かして生産する様子を学んでいく。



取組を終えて

子どもの声（感想）

子どもからは、「子牛が1日に40も乳を飲んだり、親牛が15kgも牧草を食べたりすることに驚いた」、「牛には胃は四つあることが分かりました」、「牛の口の中はあつたかくて、その舌はザラザラしていて、それで草を食べている。ちょっと変わった生き物なんだなあと思いました。」などの感想が寄せられた。

取組の成果

牛の生態に興味関心を示す児童が多く、その様子に愛着が深まっていった。また、体験活動から飼育の大変さ、難しさを実感しながら学んでいった。牛乳が出ない雄牛や廃用牛など、「人間のために生きている乳牛」の話は、体験前の「命の大切さを伝える授業」と関連させて生き物の命について考える子どももいて、大切に育て作られた食べ物をしっかり食べるといった心情も育み、食育の面も含め、大変意義のある活動ができた。

体験先、関係機関

関ファーム（江別市）